

金尾文淵堂をめぐる人々(三)

—東京時代の店員たち

石塚 純一

(文化学部助教授)

はじめに

大阪の老舗の書肆を継いだ金尾種次郎は、明治三二年にわずか二〇歳で新しい文芸雑誌を発刊し、薄田泣菫の詩集や第五回内国勸業博覧会に向けた雑誌『大阪名勝図会』を編集するなど、従来の仏教書肆からの脱却を図るが経営的には失敗し、心齋橋筋の店を売り払い借金を清算して東京へと向かう。

東京に移転した明治三八年の春*1から、金尾文淵堂かなおぶんえんどうの出版活動は新たな展開をみせ活発化する。この年に刊行した本は、大倉桃郎『琵琶歌』(三月)、薄田泣菫の詩文集『白玉姫』や河井醉茗の詩集『塔影』(六月)、綱島梁川『病間録』(二〇月)や『白馬会記念画集』(二〇月)など一三冊を数え、前回に述べたように金尾文淵堂と関係の深かつ

た二つの美術団体、白馬会と太平洋画会の図録を刊行している^{*2}。これらは一朝一夕には出来ない企画であり大阪時代から準備をしていたと思われる。金尾種次郎が一般にいわれているように「懐中一円四〇銭」で逃げるように東京へ行ったという説^{*3}は全面的には信頼し難く、かなり以前からの計画的移転だったのではないかと思われる。

またこの年の十一月には、最初の住所、東京神田区西今川町二番地から東京市京橋区五郎兵衛町二番地に移る。翌年は三二点、翌々年には二五点と大阪時代に比して格段に出版点数が増え、出版物の種類も多様化してくる^{*4}。やや手を広げすぎた感があるが、『早稲田文学』（第二次）や『日本及日本人』（政教社編）の雑誌発行もこの時で、東京移転後は金尾種次郎自身による企画編集というよりも、金尾文淵堂という出版社の刊行物の充実を図り、社会的に認知させようという意思が明らかに見てとれる。

東京に地歩をえて身近に作家や学者に接し、元々縁があった早稲田派の作家たちとは『早稲田文学』をテコにながりを強めかつ広げ、また新たに平民社関係の筆者にも接近、与謝野寛・晶子の『明星』派の人々とも交流するというように、積極的に新しい筆者を開拓する様子がかがえる。『早稲田文学』の自社広告を見ると近刊予告（中には実現しなかったものもある）の書名が誇らしげに並び、出版者として明らかに成熟の度を増したことがわかる。この京橋区五郎兵衛町時代（明治四一年まで）が全期間を通じて最も充実した時だったかもしれない。

その充実ぶりと重なるようにこの時期、金尾文淵堂には多彩な人物たちが出入りし、また籍を置いていた。店員たちの視線と彼らを取り結んだ他の出版者や友人たちとの社会的な関係の中に金尾文淵堂という出版者を置き、明治後期という時代を呼吸する一出版者としての文淵堂像を捉えなおしてみたい。文淵堂の出版物を図書館分類のよりに整理すれば、先の論文で示したように「詩・文学」「宗教」「美術」「旅」などと分けられるが、文淵堂が出した

本の筆者の、例えば児玉花外（詩）、綱島梁川（哲学）、山路愛山（歴史）、横瀬夜雨（詩）、木下尚江（小説）、望月信亨（仏教学）、水島爾保布（絵画）ら領域を異にする人々を横につなぐ糸はないか、通底するものはないのか、もしあるとすればどのような要素なのだろうか。それがある程度明らかになれば金尾文淵堂という出版社の輪郭がさらにはつきりとみえてくるだろう。

さて、金尾文淵堂の編集部で働いたことのある面々を登場させよう。大阪時代に、雑誌『ふた葉』などを編集した人々についてはすでに記した^{*5}。金尾文淵堂の全期に亘って、いっどんな社員がいたのかは未だ不明なのだが、藤田福夫は金尾夫人となった春江からの聞き書きとして「大正一〇年春江夫人が金尾家にとつがれたわけだが、その当時の「文淵堂」の使用人は一〇人ほどであったという^{*6}と記している。使用人の名まではわからず、この時期（徳富蘆花『日本から日本へ』刊行の年）に果たしてこれだけの店員がいたのかや疑問が残る。はつきりと社員が確認できるのは、東京移転後の明治三九年からの数年間である。それは荒畑寒村の『寒村自伝^{*7}』に見ることができ。この社会運動家の回想記からは、荒畑寒村とその周辺、歌人でジャーナリストの安成二郎らの足跡、また社員ではないがよく文淵堂に出入りしていた後の中央公論編集長滝田樗陰^{ちよいん}（哲太郎）の姿が浮かび上がってくる。北原白秋の弟で後に出版社アルスを起す北原鉄雄も短期間だが店員だった。

一、荒畑寒村と平民社と文淵堂

荒畑寒村（明治二〇〜昭和五六）がまだ二十歳だったころ、明治四〇年の五月から七月ころまで金尾文淵堂に雇

われていた。ほんのわずかの期間だったが、『寒村自伝』や『寒村茶話』には金尾文淵堂に関する貴重な証言が残されている。少し長いが後に登場する人物が含まれるので引用する。

菅野（須賀）の転地後、私は京橋区檜物町の出版店金尾文淵堂に雇われて、原稿とりや校正を手伝うことになった。店主の金尾種次郎氏は大阪生まれの色白な、強い近眼鏡をかけたまだ独身の若い人で、本の装釘に凝るのが唯一の道楽のようであった。私は平生、日本の出版文化に対する文淵堂の貢献は少なくないと思っているが、遂に成功しなかったのは気の毒である。

文淵堂には、安成貞雄の弟の二郎君も勤めていて広告文を書いていたが、ツルゲーニエフの『ルージン』を訳した二葉亭の『浮草』が出た時、その広告文に堂々と「露国文豪のルージン氏の傑作」とやったものだ。それで通っていたのだからおかしい。ここにはまた、薄田泣菫氏の弟で陸軍の下士あがりの某君（薄田鶴二——筆者）がいた。彼は日露戦役には満州軍総司令部の電話係をしていたそうで、いろいろ当時の面白い話題に富み、特に沙河の大会戦は彼が得意の一席であった。昼飯のあとで私たちが水を向けると、たちまちにして砲煙弾雨、たちまちにして旌旗剣戟、日露両軍最後の大会戦がその舌頭から展開される。

「……蒼い顔をして氷囊を頭にくくりつけた児玉参謀長は、前に大きな地図をひろげて、もっと戦線をすすめるとか、野津軍はもっと出ろとか、黒木軍は右へまわれとか、川村軍は左へ展開しろとか、電話で前線へ命令を下している。ところが、ロシア軍の砲火は猛烈を極め、さすがの日本軍も戦線をすすめるどころか、将兵は塹壕に身を潜めて顔も上げられぬ始末だ。殊に前線の司令官は野津をはじめとして、みな児玉の先輩や儕輩な

のだからおとなしく命令をきいちゃいない。——安全な後方で、進めなんて号令している奴はここへ来て見ろ、この弾丸の嵐の中へ飛出したら兵隊は全滅してしまうんだと、電話でどなり返してくる。戦機は刻一刻と緊張を加えて参謀長の面上、憂色いよいよ濃いとき、いま起きたばかりの大山元帥がノツソリ姿を現わして、『児玉さん、今日もまた戦争でござすか。』……」

このくだりなどは実に傑作で、聴いていると面白さに釣られて真偽を疑ういとまもないくらいである。店で出す昼飯は店主も小僧もお客も無差別で、これにはよく久留米飛白かすりの着物に小倉の袴、東北弁まる出しの大学生が会食したが、これこそ後に『中央公論』の名編集長とうたわれた滝田樗陰ちよんであった。（『寒村自伝』）

この回想にはいくつもの情報が含まれている。明治四〇年ころの金尾文淵堂に寒村、安成二郎、薄田鶴二つとむがおり、食客のように出入りしていた滝田樗陰の名がみえる。また、広告文書きや原稿とりや校正の仕事を社員が分担していたこと、話術巧みな薄田泣菫なぐさの弟鶴二つとむのキャラクターも面白いが、日露講和に反対する騒動（日比谷焼き打ち事件）が起きた時代にこのような笑いを共有する雰囲気きょうきが文淵堂にあったことを、昼飯の様子ようすのさりげない描写びやうに感じることができることができる。[＊]

荒畑寒村自身は、つづけて「文淵堂にも永く辛抱できないで再び浪人にもどった」と書くようにまもなく辞め、「大阪日報」記者として下阪するが、金尾文淵堂との付き合いはその後も続いた。大逆事件後の「冬の時代」、大正元年一〇月に大杉栄と荒畑寒村は雑誌『近代思想』を創刊する。時事問題を避け文壇や思想界に新しい風を送った『近代思想』の広告集めのために文淵堂へ顔を出した記事がみえる。

大杉や私もよく広告とりに出かけた。お得意さまは雑誌『実業之世界』の野依秀市、丸善の顧問内田魯庵、出版店文淵堂の金尾種次郎、三越デパートの松宮三郎、ライオン歯磨の中尾傘瀬の諸氏。これらの人々は半ば私たちに対する同情、半ば雑誌の主張に対する興味から、いつも好意的に広告を出してくれた。金尾さんなどは『日刊平民』の廃刊後、私が一時文淵堂に勤めていた関係もあり、それに「今月は出しません」と断られると、世の常の広告とりのように粘らずに言下に帰る私の態度が気に入ったといつて、よく広告をくれた。（『寒村自伝』）と回顧する。

平民社と金尾文淵堂

明治三六年十一月、日露主戦論に傾いた『万朝報』を退社した幸徳秋水と堺利彦は、非戦論の立場から『平民新聞』（週刊）を創刊した。海軍造船工廠の見習職工だった荒畑寒村は『平民新聞』を読み、二七年一月に上京して、社会主義演説会に参加するなど平民社の活動に加わっていく。『平民新聞』は三七年一月の第五二号の発行禁止処分から政府の禁圧をうけて三八年一月の六三号で廃刊を決定。平民社も同年九月に解散する。四〇年に日刊『平民新聞』を発刊し一時的に再建されるが、弾圧を受けて四月には再び解散する。荒畑寒村と金尾種次郎が出会うのはちょうど金尾が東京に出店し、平民社が解散にむかう時期にあっていた。個人的に寒村が金尾種次郎に雇われたというにとどまらず、平民社への金尾文淵堂からのなんらかの働きかけがあったと思われる。平民社に関係する人々の本（安部磯雄や堺利彦ら）ががつぎつぎと刊行され、殊に木下尚江のベストセラー小説の版權を文淵堂が買ったこ

とからも金尾が平民社と密接なパイプを持つようになっていたことがわかる。^{*10} 平民社は「有楽町の数寄屋橋に近い日本劇場のあたり」と『寒村自伝』にあるように、文淵堂のある京橋とも近く、印刷所も同じ国光社を使っていた。明治時代のいわゆる初期社会主義は、ユートピア主義、キリスト教あるいは無政府主義的な要素が流れ込んでおり、混沌とした思想状況を呈していた。平民社に参加した人物たちの大半が、幸徳秋水を除いてキリスト教や新仏教運動の洗礼を受けた人たちだった。金尾文淵堂が刊行した仏教書の筆者には新仏教運動に関わった人物が多いが、網島梁川や海老名弾正らキリスト者も含めて、文淵堂に登場する初期社会主義者、仏教学者らは、宗教的な指向性をもつ社会派とでもいえるべき共通基盤をもっていたかもしれない。

しかし、金尾種次郎が平民社の主張に同調したと考えるべきではない。平民社は社会運動家たちの梁山泊にたとえられるが、平民文庫を出版し、新聞と本の売上を唯一の収入源とする一つの出版社でもあった。社会主義者や無政府主義者にかぎらぬもつと裾野の広い文化的な拠点の一つであった。そういう意味では文淵堂も平民社に近いライン上に立っていたと考えるべきだろう。

金尾種次郎自身は生涯を通じて出版者として「思想」をもった人物とはいいがたい。彼の思想信条が話題に上るときには決まって「毎日浅草の観音様に詣でる熱心な仏教徒」だったと片付けられることが多い。にもかかわらず文淵堂の刊行物を眺めると、児玉花外『社会主義詩集』（明治三六年）、網島梁川『病間録』（明治三八）、安部磯雄『理想の人』・山路愛山『社会主義管見』（明治三九）、堺利彦『婦人問題』（明治四〇）、木下尚江の小説『良人の自白』続編（明治三九）やエッセイなど、時代の思想的・社会的な潮流の真つ只中で生れたものであることがわかる。金尾種次郎が木下尚江の毎日新聞に連載した人気小説「火の柱」（明治三七年一月から三月）に関心を抱いたことは、

新聞小説の単行本化を目論む文淵堂の戦術からして自然だが、それだけではなかった。これらの本を金尾が確信的にラインナップしたとは言えないにしろ、社会的弱者に対する同情と混沌としての社会主義にシンパシーを抱いていたことは確かだろうと思う。

二、安成二郎とアルスと平凡社

『寒村自伝』に登場する安成二郎（明治一九〇〇昭和四九年）は、ジャーナリストとしての自らの回想記『花万朶』はなまんた（同成社、一九七二年）の中で金尾文淵堂について書き残しているのが、以下にそれを紹介するが、荒畑寒村が「安成二郎君が貞雄の令弟であることは、断るまでもあるまい。私の記憶では、二郎君を初めて識ったのは明治三八年、貞雄が下宿していた四谷の駅に近い建具屋か何かの、天井のない屋根裏みたいな一室であった。二郎君は郷里から上京したばかりで、私には兄弟の秋田弁の会話がほとんど理解できなかった。」と記すように、*12大館の中学を中退すると、早大在学中から平民社に出入りした博学で毒舌、酒飲みの兄安成貞雄（明治一八〇〇大正一三）を頼って上京、その縁で大杉栄や荒畑寒村と交わり『近代思想』に参加した。上京後まもない明治三九年に金尾文淵堂の店員となったのである。

『花万朶』は、新聞記者・編集者として折にふれて書き継いだ備忘録と本人が記すように、明治・大正・昭和の文壇・新聞出版界の裏面を綴って興味深く貴重な証言集であり、彼には他に『無政府地獄 大杉栄襟記』（新泉社、一九七三年）の著書がある。安成二郎はまた歌人であり「豊葦原瑞穂の国に生れきて米が食えぬとはウソのよな話」

というユーモラスな歌でも知られている。

安成二郎は金尾文淵堂でどんな仕事をしていたのか。本人の言葉を借りよう。

明治四十年の一月一日に『日本及日本人』の創刊号が出た。島村抱月氏が外遊から帰って来て『早稲田文学』を再刊したのも同じ時であった（『早稲田文学』第二次の発刊は明治三十九年一月―筆者）。どっちも発行所は京橋区五郎兵衛町の金尾文淵堂で、私はその店員をしていて、二つの雑誌の係りになった。編輯所から届く原稿を築地の印刷所国光社へ廻す係りであったが、『早稲田文学』は相馬御風氏、『日本及日本人』は井上亀六氏が編輯責任者であった。どっちもメ切日までに原稿がきちんとまとまっては来ず、殊に『日本及日本人』は原稿の種類と順序が毎号殆ど決っていて、それを出来次第に送ってよこし、後には組ミや活字の指定を私がやるようなこともあった。巻頭に先生（三宅雪嶺―筆者）の「題言」が一頁あり、これは先生自筆の原稿であった。^{*13}

続けて、著者が行なういい加減な原稿指定では印刷所が思うように仕事をしないので、自分が指定をすることになったことや、三宅雪嶺先生の原稿だけは校正が終わっても出張校正室に捨てられていかなかったが、一度だけ先生の「題言」の原稿を拾ったことがあり、それを内田魯庵に話したところ、収集癖のある内田に懇望されて差し上げたこと、印刷所にやって来た三宅雪嶺とはじめて出会ったのもその校正室だったという回想がつづく。のちに彼は信頼されて三宅雪嶺の口述筆記を担当する。口述筆記は編集者の重要な仕事で、当時の著名な筆者の原稿はほとんど口述筆記だった。

文淵堂は『早稲田文学』と政教社の『日本及日本人』の発行元をそれぞれ願ひ出て果たすが、上記のように内容も体裁もすべて編集部（早稲田文学社と政教社）で決めたことを言われる通り実行していたに過ぎない。『早稲田文学』の発行元になることは金尾種次郎にとって念願だったので、誇りに思っていたことは確かだ。しかし、経営状況が不安定な金尾文淵堂にまかせることについては坪内逍遙や島村抱月らに疑念もあり、金尾文淵堂は編集に一切口出ししない、編集費を月極め（二五〇円か？）で支払うという条件を付けて引き受けさせたことや、金尾が律儀にその編集費を払ったことなどを近松秋江は『文壇三十年』（千倉書房、昭和六年）で書いている。

『日本及日本人』の編集費については、安成二郎が次のように述べ、併せて自分に支払われた月給を記す。

月末に文淵堂から先生のお宅へ編輯費を届ける使いをした。赤坂新坂町のお宅の玄関で、いつも柱に凭れかかるようにして立っていられた花圃さんが思い出される。編輯費は二百五十円であったと思う。物の安い時分であった。私の月給は十三円であった。（『花万朶』）

『日本及日本人』に連載された河東碧梧桐の「一日一信」が後に『三千里』（金尾文淵堂、明治四三年）と改題されて大部の日本旅行記として文淵堂から刊行されたことも安成は記述している。

では、安成二郎はどのような経緯で金尾種次郎と出会い、店員になったのか。

明治三十九年に宮田暢氏（修先生の弟で『火鞭』の創刊者）の紹介で、私は内田魯庵先生の牛込砂土原町のお

宅へ通い、先生がいろいろの雑誌に書かれた翻訳などを原稿紙に一行おきに書きうつした。内田先生は凝り屋で、それに手をいれて出版されたのである。(内田先生は宮田家と近い親戚である) ある時、先生の使いで京橋の書肆金尾文淵堂へ行ったが、それが縁で、「あの使いに來た青年を店員に欲しい」と言われ、私は文淵堂の店員になり、出版書の奥付の広告や新聞広告を書くことになった。(『花万朶』)

金尾種次郎は内田魯庵を尊敬し、出版のブレインのように遇していたと思われる。この文にある、魯庵に安成を紹介した宮田暢の『火鞭』という雑誌は、平民社を母体として生れた社会主義青年文学者の機関誌で、児玉花外・白柳秀湖・中里介山らが参加した。安成貞雄も加わっていたのでその縁で二郎が内田魯庵に紹介されたのであろう。内田魯庵の翻訳でトルストイの『イワンの馬鹿』(明治三九年)が火鞭叢書第一冊として出されたが、すぐに文淵堂刊となっている。『火鞭』も同年五月には終刊となった。ここにも金尾文淵堂と初期社会主義者たちとの接点を見出せる。

安成は二つの雑誌の編集だけをやっていたわけではなかったようだ。その一端を知る話が『花万朶』に載る。大塚楠緒子の新聞連載小説を文淵堂から刊行する仕事も担当した(文淵堂の倒産で実現はしなかった)といい、その途中で大塚を訪ねた際のことを『国民新聞』に書いた経緯を次のように綴っている。

この訪問記は、当時、金尾文淵堂の店員だった私が、大塚夫人が『万朝報』に連載中の長篇小説「露」の出版を夫人から申込まれ、文淵堂がそれを承諾して、夫人との交渉を私に命じたので、本郷西片町のお宅へも参上

していたので避暑先の鎌倉へもお訪ねした時のスケッチで、この原稿を書いて、当時『国民新聞』の社会部長をしていた千葉亀雄氏に頼んで、国民新聞の明治四十年七月三十日の紙上に掲載された。(中略)ところが文淵堂は四十一年に破産してしまった。そして楠緒子夫人の小説「露」と私との縁も切れた……(『花万朶』)

文中、「長編小説『露』の出版を夫人から申込まれ」とあるのは事情が違うようだ。夏目漱石が大塚楠緒子に宛てた手紙^{*15}をみると、「拝啓 金尾文淵堂であなたの万朝に出る小説を頂いて本にしたいと申ます夫で此男があなたへに紹介してくれと申ます御迷惑でなければ一寸逢ってやって下さい 以上」とあり、金尾種次郎が漱石に頼んだ事実が明らかだ。漱石が楠緒子夫人を高く評価して、明治四三年一月に三六歳で病死した楠緒子を悼み「有る程の菊投げ入れよ棺の中」の一句をつくった話は有名である。

金尾文淵堂は『仏教大辞典』の蹟きで明治四一年に破産に追い込まれ、安成も店を辞めるが、金尾種次郎との関係はその後も続いた。『日本及日本人』の筆者として親しくなった長谷川如是閑からの明治四一年七月二九日付の安成宛ての手紙には、金尾文淵堂が苦戦していることへの同情の言葉がみえる。「文淵堂も殆ど創業同様故、当分は中々骨の折れる事なるべし」「金尾君の事なれば何とか更にめを吹く事もあるべし、君も一旦事を共にせし以上は少しの苦痛は踏張って見たら如何」などとある。また、その翌年の夏かといい、関西(天下茶屋)の如是閑(当時大阪朝日にいた)を訪問したこと、その翌日から「大阪にいる金尾さんの紹介状を貰い」、大和の小さな村の寺に一週間ほど厄介になったとあるので、金尾との交流が続いたことがわかる。

安成二郎は文淵堂を辞めたあと、太平洋通信社の週刊『サンデー』記者、『楽天パック』記者、大正三年『実業之

世界』記者・編集長、同社『女の世界』『探偵雑誌』の編集、大正八年『読売新聞』記者、大震災後『大阪毎日新聞』東京在勤嘱託、その後平凡社で『大百科事典』の編集などと新聞社・出版社を転々とする。それぞれの場での会い交流を深めた学者や作家たちについて『花万朶』は記録する。登場する文人は綺羅星のごとくだが、編集者や記者仲間についての記述も興味深い。たとえば本書の最後に載る次の一文である。

この随筆集『花万朶』の出版に関わったという元平凡社員の古河三樹松に、ぜひ、平凡社前社長下中弥三郎氏を短くとも書き加えて貰いたいといわれ、

そういわれて私もなるほどと思った。私も平凡社の『大百科事典』の頃から三四年厄介になり、同じ編集室に古河君と一緒におり、「日時計」の小原君（小原銀之助）とも同室で今も親しい仲であり、この『花万朶』の編集発行についても、両君の多大なお世話になっているのだ。（中略）平凡社と私の関係は、昭和四年一月といえは古い、麴町区下六番町の有島武郎氏の亡きあとの邸宅である。そこを平凡社が借りていて、『新興文学全集』がそこから出た。その第十巻は詩歌集で、私の詩と短歌が集録されている。（中略）それで平凡社と著者としての私の縁は切れた。読売や大阪毎日の東京在勤の嘱託などとして十余年を過ぎた。そこへ平凡社にいた近藤憲二君が来て、私を社長下中弥三郎氏に会わせたのである。社は呉服橋外にあり、『大百科事典』の終る前であった。そこには旧知の守田有秋君もいて、思えば昔懐かしい編集室であった。同じ編集室で小原君、古河君にも逢った。

長々と引用したが、ここには金尾文淵堂で修行しそこからスタートした安成という一編集者の辿り着いた足跡が表

われ、古河三樹松、近藤憲二、小原銀之助ら、編集者というか運動家・学者というか風変わりな友人が登場する。古河三樹松は大逆事件で刑死した古河力作の弟で、自身もアナキズム運動に関わり、平凡社では昭和一〇年ころの『名作挿絵全集』全一二巻などを編集担当し、戦後は四谷の公設市場内に小さな古河書店を開いていた。^{*16} 小原銀之助は戦後、全国各地の小学校などに二五〇基以上の日時計を製作して話題になった人物で戦前の平凡社社員。近藤憲二はアナキストで、『無政府主義者の回想』（平凡社、一九六五年）の著書があり、妻は堺利彦の娘真柄。雑誌『労働運動』を大杉栄らと刊行し、その後大杉の紹介で次に述べる北原鉄雄の出版社アルスに入社、そこで大正一四年から翌年にかけて『大杉栄全集』全一〇巻を安成二郎とともに編集した。その後生活に困って下中弥三郎を訪ね、昭和三年に平凡社に入社した。

平凡社社長下中弥三郎は日露戦争の時には『平民新聞』に反戦詩を書いて平民社とも関わりを持ち、その後教員をつとめたり『婦女新聞』などの編集者をして大正三年に平凡社を創立した。戦前の平凡社にはアナキストやアジア主義者がよく社長を訪ねて来たという。^{*17} 近藤憲二も幾度か平凡社を出たり入ったりしたと前掲の著書に記す。ほとんど無名の彼らはそれぞれの経歴の中で編集という仕事を通じて出会いつながっていく。荒畑寒村―安成二郎―古河三樹松―下中弥三郎―近藤憲二―北原鉄雄―金尾種次郎―荒畑寒村というように、金尾文淵堂にはじまる編集者たちは連環しつつ、アルスから平凡社へと流れ着いていくところに興味がひかれる。出版社は文化的な交流の場であると同時に、食いつぶした文人の避難所などところでもあった。出版社と出版社との関連性も、系列という現代的な側面ばかりではなく、編集者の移動や企画の影響関係など個別なつながりが積み上げられるところに見えてくる。

北原鉄雄（明治二〇年～昭和三二）

金尾文淵堂は大正三年、北原白秋の『印度更紗 真珠抄』（九月）と『白金の独楽』（一二月）を発行する。白秋は二九歳である。「桐の花事件」といわれた不倫問題が一応決着し、白秋は当の俊子と結婚して三浦三崎へ転居（大正二年）するが父と弟鉄雄の事業も失敗、俊子と父母の間もうまくいかず、俊子の肺病を癒そうと離島小笠原に三ヶ月間住んだが逃げ帰る、失意と困窮の年である。年末に刊行した『白金の独楽』は、装釘装画を白秋自身が手がけ、その出来映えに満足したと「地上巡礼」に記している。「印度更紗第二輯『白金の独楽』は十二月一八日愈発刊したり。装幀紙質、版画、等に就きては少からず苦しみたり、かかる我儘にして贅を尽したる詩集わが従来のものにも一もなし。之に対する文淵堂主人金尾氏の好意は極めて感謝す可きものなり……」^{*18}。

おそらくこの前年に、北原鉄雄は文淵堂につとめることになった。与謝野寛・晶子の長男光の回想によれば、鉄雄は本屋をはじめたいと思い、白秋が晶子に口添えを依頼、「金尾文淵堂に頼んで住み込んで、それで番頭さんになったんです」^{*19}という。白秋全集の年譜によれば、鉄雄と父親がはじめた三浦三崎での魚類仲買業が大正二年九月に失敗したとあり、おそらくこのあと鉄雄は東京に戻り文淵堂に入ったのであろう。

このころ文淵堂は明治四一年の倒産から徐々に立ち直って与謝野晶子の『新訳 源氏物語』第一巻（明治四五年）などを刊行していたが、店は平河町の路地の「玄関の二畳を入れて、やっと三間位の家」^{*20}であった。北原鉄雄自身が金尾文淵堂について語った文は未だ見つからないのだが、翌大正四年に独立して阿蘭陀書房をはじめ、その後出版社アルスを設立する。藤田福夫が、「阿蘭陀書房、アルス両店の美本には白秋の好みもつよく投影していると

に「文淵堂」の美本出版の影響も十分考えられると思う^{*21}」と述べるように、文淵堂での経験が後のアルスの出版活動へとつながるのは間違いなからう。

三、滝田樗陰と金尾種次郎

先の『寒村自伝』に、金尾文淵堂の昼食時によく現れた東北弁まる出しの大学生が後の『中央公論』の名編集長滝田樗陰（明治一五年〜大正一四年）だったとあった。滝田樗陰は金尾種次郎より三歳年下であり、ほぼ同世代の編集者である。日本の出版史上、編集者としてもっともその名を知られているのが樗陰である。明治四〇年頃金尾文淵堂に出入りしていたことは他の資料からも窺え、もちろんただ飯を食いに来ていたわけではなかった。

杉森久英の『滝田樗陰』（中央公論社、一九六六年）によれば、樗陰は明治三六年九月に東京帝大英文科に入学し、その年の冬から『中央公論』の「海外新潮」欄^{*22}のアルバイトの翻訳記者として月々五円で雇われた。翌年、英文科から法科に転部したので、明治四〇年頃はまだ大学生であったが、「海外新潮」欄の翻訳を続けながら、当時『中央公論』編集部員だった近松秋江に連れられて著名な作家に会うようになり、やがて力量が認められて明治三九年末には正式記者になった。

正式記者になる以前から、彼は『国民新聞』を訪ねて徳富蘇峰に会おうとするなど、中央公論以外の出版社や新聞社とコンタクトをとっていた。蘇峰との面談はなかなか果たせず、ようやくチャンスを得ると初対面で好意を持たれ援助さえ受けた。また当時『読売新聞』の主筆だった竹越三又（与三郎）にも取り入って、日曜付録の文学欄

へ小説月評を書かせてもらうなど、早くからあちこちで企画を売り込み、記事を書いていたのである。

金尾文淵堂での「昼食」もそのような行動の一つだったのだろう。彼は文淵堂にも企画を持ち込んだ。明治四〇年に出た伊藤銀月『五十三次草鞋日記』がそれで、序文の「東海道汽車に依らざる旅行」で銀月は、「滝田哲太郎氏、一日余を訪うて云ふ、東海道を汽車に依らずして旅行するの意無きか」と誘われて、企ては面白いが若い時ならいざしらず、今となつては半ば歩行に半ば人力車、宿代や飯代、名物の風味や名所探索など一〇日以上要するし、その費用は汽車代の十倍は掛かる、今の自分にはそれだけの余裕は無いので見合わせるのが分別というものと答えた。すると「滝田氏之を聞いて微笑して曰く、若し、其旅費を支出し、且つ其旅行記の出版を引き受けたしと望む者あらば如何」と言い、伊藤銀月を納得させて実現したのがこの本だった。^{*23}

伊藤銀月は滝田樗陰と同郷（秋田県）の文士で、『万朝報』記者、『平民新聞』の寄稿者でもあった。樗陰は東海道徒歩紀行という企画を著者と金尾文淵堂に売り込んだのである。秋田県出身といえ、銀月と樗陰だけではなく、安成貞雄・二郎兄弟や平民新聞に挿絵を描いた平福百穂、新潮社の創業者佐藤義亮も同時代の同郷である。

さて、樗陰はまだ大学生編集者だったが、早くも夏目漱石に接近し（大学の英文科の講師として知り合いではあった）、食いついて離れず、ついに明治三九年一〇月、『二百十日』を『中央公論』に書かせることに成功、以後次々と傑作が誌上を飾る。漱石には叱られもしたが信頼関係が深まり、同年一一月には、漱石に『読売新聞』の文壇担当を引受けないかと仲介までしている。結局漱石はこの申出を断るが、この間の事情は大学教授を辞めるかどうかを含めて悩む漱石の滝田哲太郎宛の返書に明らかである。^{*24}このように樗陰は『中央公論』編集部内で腕をみがき存在感を大きくしながら、半分大学生という自由な立場を利用して他社の仕事もどんどん手がけていたのである。

一方、金尾文淵堂も夏目漱石にアプローチしている。漱石の「書簡集」に見る限り、最も早くその名が表れるのは、「明治三八年七月一六日 中川芳太郎宛」だから、上京後間もないころのことである。「僕（漱石）も勉強はしたいがいやはやの至りだ。（中略）中央公論のチョイン先生がきてなにかかけといふ、隆文館が来て猫を出版させるという。金尾文淵堂なるものが何か出版するからかけといふ。（後略）」とあるように、滝田樗陰の名と金尾文淵堂の名が同時に出てくる。来訪者が多い上に、大学の公務や講義録の作成がいそがしく勉強ができぬと嘆いているのである。もしかすると金尾種次郎は滝田の紹介で漱石に会ったのかもしれない。

その後、明治四〇年の五月の漱石書簡（滝田哲太郎宛）は、金尾文淵堂が自分の十八世紀文学の講義録を出版させて欲しいと頼みにきたことをめぐって記している。著者と編集者の関係が表れていて興味深い。漱石はそれを基本的に了承したが、金尾種次郎は講義録の再筆録を滝田哲太郎一人にまかせてうまくいくだろうかと述べたという。しかし、もともとこれは滝田君が言い出した企画だから君の立場を考えて、金尾には次のように書き添えておくとして、「十八世紀文学は滝田君との関係上から同君に対する好意上許諾をしたものだから向後の談判は出版の手続きに至る迄契約書を取り更す迄はすべて同君を経て御協議を経度く候」と記している。漱石の若い編集者樗陰への配慮は心憎いばかり、さらに追伸で「手許に十円ばかりあり。御不如意の由なれば失礼ながら用を弁せられ度し。御返済は卒業して金がウナル程出来た時でよろし。御母上の御病氣御大事と存候。試験には是非共及第する程に勉強可被成候」とまである。^{*25} 自分の学生を可愛がるようなものかもしれないが、金尾への対応との違いに、漱石の編集者評価を見てとることができる。

このように樗陰は編集者の素質を学生時代から発揮していた。アルバイトで始めた編集にのめりこみ過ぎて結局

卒業できずに、中央公論社に入社するわけだが、二〇歳になるかならぬかで外国新聞・雑誌の評論の翻訳を二年間続け、その経験によって学識・見識を深め、好きな文学・小説を読むと同時に作家に直接会うという出版社の仕事に鍛えられ、編集者としての批評眼を養うことになった。樗陰は、受け取った原稿をその場で読み、気に入った箇所を作家の目の前で音読したという。多分にスタンドプレー的だが、誰にでもできる芸当ではない。学者や作家のふところに飛び込む才能が樗陰には備わっていた。さらに人と人を結ぶ仲介者の能力、企画を立て売り込む手腕も若くして持っていたのである。

明治四〇年、金尾種次郎は二八歳、滝田樗陰は二五歳であった。金尾種次郎も大阪で老舗の出版社を新しい文芸出版社へと脱皮させようと意欲的な新雑誌を創刊し、才能ある新人の詩人薄田泣菫を世に送り出し、大阪最大のイベント第五回内国勸業博覧会のために『大阪名勝図会』を雑誌形式で編集し刊行した。雑誌は結果として成功せず経営の悪化をもたらしたが、心齋橋筋の書肆を売り払い、借金を清算して東京へ進出、心機一転、明治三八年から次々と企画を実現する。『白玉姫』『白羊宮』（泣菫）、『塔影』（河井醉茗）、『海堡技師 瞑想詩劇』（岩野泡鳴）『夢之華』『黒髪』（与謝野晶子）『二十八宿』（横瀬夜雨）などの美しい詩・歌集を編み、平民社に接近して木下尚江の小説や堺利彦らの評論を刊行、網島梁川の話題の宗教書『病間録』や、白馬会や太平洋画会の図録などを堰を切ったように刊行した。

滝田樗陰は自信過剰で、著者の好き嫌いがはげしく、大時代で癖は強いけれど名文を書き、蘇峰に頭脳明晰と言われたように雑誌編集にはつきりとした方針をもって臨んだ。文学や思想に対して自身の批評をもつ編集者であった。それに対して金尾種次郎は、著者との人間関係を第一に、紹介を通じて人脈をつくることによって企画を展開

し、みごとな本作りで著者を感じさせる職人タイプの編集者・出版者だったといえよう。先にみたように榑陰が「十八世紀文学講義」の出版企画を漱石に持ちかける編集センスと、その実現のために講義録の書き直しを滝田榑陰にやらせたいという漱石の信頼感をみると、残念ながら編集者として金尾はかなわない。二人のタイプの違いは、単行本の出版者と雑誌の編集者の違いといえるかもしれない。書籍の編集者の方がずっと著者との人間的つながりが強く、雑誌編集はどちらかといえばアイデアと批評的センスがものを言う。あるいは滝田を新しい時代のエリートタイプの編集者、金尾を古風な商売人的・職人的編集者、新旧の仕事のスタイルがここに表れているといえるかもしれない。

漱石は座談の中で、こんなことを語っている。コミッションをむやみに否定してはいけないという文脈で、「文淵堂の主人が未だ失敗しない前に、僕の許へ来て、如何です、家を建ててあげませうかと云ふんだよ。其頃の僕は南極のペンギン鳥の様なものでそれを貰つておいたら後難が恐ろしいなぞとは夢にも思はんのだね。只、世には親切な人も有るもんだと思つて居た^{*26}」。いかにも金尾らしい物言いである。何の後ろ盾も無く東京へ出てきて、世間に出版者として認められるためには、夏目漱石の本を作りたかつたのだろう。非現実的で卑屈な申出だが、モノや金銭あるいは有利な条件を提示して原稿を約束させる出版社の手法は、昔もいまも変わらない。出版は他社との競争、著者を獲得する競争であり、漱石は芥川龍之介への書簡で滝田榑陰に対しても、「よく物を呉れる人」と評し、「僕はその人を『ポロツカイ』又は『あくもの食ひ』と称してゐます^{*27}。」と言っている。

滝田は『中央公論』を一流の雑誌へと導き、作家たちから注目を浴び多くの評言を書き残されて有名になったが、道半ばで若くして病死した。金尾はユニークな美しい本のかずかずを残したが出版者としてはついに成功を見ること

なく、個人の生涯とともに歴史から忘れ去られた。

金尾文淵堂は、昔も今も無数にある個人商店（出版社）の一つで、主人の器量によって出版物も経営もすべてが決まってしまう。金尾は幾度かの経営的な失敗にもめげず、起きあがりこぼしのように出版を続け、零細な店にもかかわらず店員を雇い協働しようとし、人々はこの小さな場を通過点としてそれぞれの道を開いていった。金尾は筆者を訪ね歩き、また店には来客も多かった。専門も性格も異なる作家や学者や思想家や画家や運動家が往来する出版社は、一つの文化的な装置ともなる。明治四〇年前後の文淵堂にそんな一瞬をみることができる。

注

- *1 文淵堂がいつ大阪から東京に移転したか、その正確な年月日は不明である。しかし、出版物の奥付の住所によってある程度ことが判明する。大阪で最後に刊行された与謝野晶子『みだれ髪』（初版版元は東京新詩社）第三版の奥付は明治三十七年九月とあり、東京の住所を最初に示す同『小扇』の再版本の奥付が明治三十八年三月であるから、この間に移転があつたはずである。つまり明治三十七年末から三十八年正月ころと推定される。
- *2 拙稿「金尾文淵堂をめぐる人々——画家たちと出版者」(二)（『比較文化論叢』10札幌大学文化学部紀要、二〇〇二年）
- *3 「懐中僅かに一円四〇銭」と記したのは、小川菊松『出版興亡五十年』（一九五三年、誠文堂新光社）であり、足立巻一「文淵堂・金尾尾種次郎覚書」も田熊潤津子「金尾種次郎年譜考」もこれにならっている。
- *4 前掲*2拙稿付載の刊行書目年表を参照されたい。
- *5 大阪時代に編集の仕事をしていた薄田泣菫、文淵会の青木月斗ら、平尾不孤、松崎天民については、拙稿「金尾文淵堂をめぐる人々」（一）、同（二）を参照されたい。
- *6 藤田福夫『近代歌人の研究』笠間書院、昭和五八年
- *7 『寒村自伝』一九四六年、板垣書店初版、増補岩波文庫版一九七五年

*8

薄田鶴二は、明治三八年刊の綱島梁川『病間録』編集のころから文淵堂に勤めていた。松村緑『薄田泣菫考』によれば、「日露戦争に従軍して凱旋の後、出版業を志して上京し、泣菫と親しい間柄であった出版書肆金尾文淵堂に就職し、後独立して獅子吼書房を経営したが間もなく廃業、大正三年岡山市の中国民報社に入り、昭和七年同社支配人の椅子を去つて……（中略）」とある。獅子吼書房では綱島梁川遺稿『書簡集』上下巻（明治四一・四三年）等を刊行した。安成二郎の『花万朶』には、金尾文淵堂が倒産したのちに「外の店員は、泣菫さんの弟の鶴二君など三人共同で京橋南小田原町で出版業をはじめた。瀬沼夏葉女史の『チェホフ傑作集』は、そこへ遊びに行つて私がプランを提供したのであった。が、その三人の仕事も長くつづかなかつた」とあり、他の社員らと出版社を起したとあるが、これが獅子吼書房なのか。薄田鶴二は昭和二〇年三月、数え年六六歳で兄泣菫に先立って死んだ。

ここでこの時期に金尾文淵堂の店員だったことが確かな二、三の人物を取り上げておく。一人は『寒村自伝』には登場しないが、中山三郎（泰昌）という人物である。『綱島梁川』（近代文学研究叢書九）の巻末に収載の聞き書きによれば、明治三八年から四〇年ころ、文淵堂で編集・販売を担当した。綱島梁川の係りとして「私が先生のお宅へ出入りするようになったのは明治三八年病間録が出版され、それが大当りをとつてからでした。その頃すでに先生は病床にあり、一面先生は大変謙讓な方でした。書簡集の中に見える種々の手紙をみてもわかる通り私共のようなものや、出入りする学生などに対しては「吾が祈禱を贈る、明治四十年四月八日、安成二郎」とある。もう一人は、安成二郎の『花万朶』に安井某と記される人物である。安成の蔵書の中に安井某から贈られた『世範』（明治三三年一月刊）という本があること、その扉に「吾が祈禱を贈る、明治四十年四月八日、安成教兄」と墨書があり、「贈った人の名は署していないが姓はよく覚えていいる。安井君である。安井君は中村春雨夫人の弟で、その時分、安井君も私も京橋五郎兵衛町の金尾文淵堂の店員をしていた。（中略）安井君はどうしているだろう。同君が文淵堂にいたのはほんのしばらくであつたように思う。まもなく聖職のほうに進んだのではなかつたらうか。」（安成二郎『花万朶』）と記すので店員と判明。中村春雨は金尾文淵堂が大阪時代に出版した『無花果』の著者で、大阪出身のクリスチャンであり、『新約物語』なども出した。金尾とは親しい関係にあり、泣菫の弟や白秋の弟などが社員になつたのと同様に、筆者や友人のコネクションによつて社

員が集められていることがわかる。

* 9 湯川松次郎「大阪書籍業界人物誌」「上方の出版と文化」(上方出版文化会、一九六〇年)所収には、「ある日私は東京麹町の氏の店を訪ねた。彼は留守であったが丁度昼食の頃で私は社員にうどん屋へ食事を注文してくれと頼んだ。するとその社員らが私の顔を眺めてくすくすと笑うから、わけを聞くと支払いが滞っているから持参しないと言うのであった。暫くすると彼は焼き芋を新聞紙に一ぱい包んで帰って来た。さあ湯川さんおあがりと言ってくれた。こんな困難な最中であつても、氏は諸先生方を大切にすることだけは忘れなかった」と、文淵堂の昼飯のことが載る。

* 10 前掲*2に「木下尚江氏の著で平民書房発行の「火の柱」一巻および「良人の自白」四巻の紙型を、金一千元という、当時では法外に高い値段で引受けた」とある。小川の回想は平民社の名称を誤記するなど信頼性に欠け、版權の額が一千元だったとは確かに信じがたく、文淵堂が金の工面をどうしていたのかも不思議である。太田雅夫『初期社会主義史の研究』(新泉社、一九九一年)は、平民社に出入りする人々一覽を掲げ、地方からやってきて立ち寄る人の大阪の欄に「金尾文淵堂」の名を加えている。

* 12 前掲*6「寒村自伝」

* 13 安成二郎「花万朵」(同成社、一九七二年)

* 14 『火鞭』は、児玉花外、小野有香、山田滴海、山口孤剣、中里介山、原霞外、白柳秀湖を發起人として結成された火鞭会の機関紙、明治三十八年九月から三十九年五月まで発行され、『ピラメキ』に合併した。

* 15 『漱石全集』(岩波書店)一四巻「書簡集」明治四〇年七月一九日付

* 16 「月の輪書林 古書目録9 特集Ⅱ古河三樹松散步」一九九六年。私事だが一九七三年、私が平凡社宣伝部にいたころ、月ぎめで取っていた雑誌類を毎回届けてくれる小柄なおじさんが古河書店の古河三樹松氏だった。

* 17 『平凡社六十年史』一九七四年

* 18 『地上巡礼』(二巻一号、大正四年三月)の社報欄。同誌は大正二年に北原白秋が創立した詩歌結社巡礼詩社の機関誌、大正三年九月に創刊。

* 19 与謝野光『晶子と寛の思い出』(思文閣出版、一九九一年)

- * 20 広津和郎『年月のあしおと』（講談社、一九六三年、講談社文芸文庫版、一九九八）
- * 21 藤田福夫前掲*5
- * 22 『中央公論』の前身は、浄土真宗の青年僧侶たちの修養団体、反省会の機関誌『反省会雑誌』（明治二〇年創刊）だった（明治三二年一月号から改名）。雑誌の有力な後援者だった若き第二十二世門主大谷光瑞は海外に目を向け、外国雑誌や新聞を購入し、自分で目を通したのちに、諸紙に載った政治・社会に関する評論を翻訳紹介するよう編集部に指示したその欄である。
- * 23 伊藤銀月『五十三次草鞋日記』（金尾文淵堂、明治四〇年五月）
- * 24 『漱石全集』一四卷「書簡集」より、明治三九年一月一六日 滝田樗陰宛
- * 25 『漱石全集』一四卷「書簡集」より、明治四〇年五月 滝田哲太郎宛
- * 26 『漱石全集』一六卷「別冊」より、「漱石山房座談」大正三年
- * 27 『漱石全集』一五卷「続書簡集」より、大正五年九月一日 芥川龍之介、久米正雄宛

※本稿は平成一四年度札幌大学研究助成による研究成果の一部である